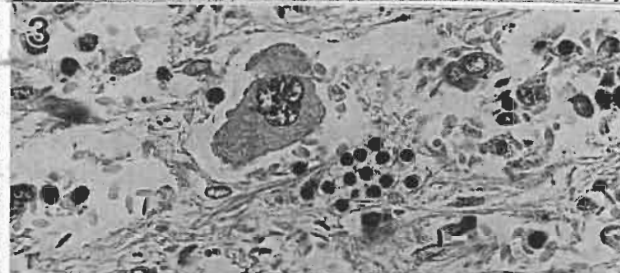
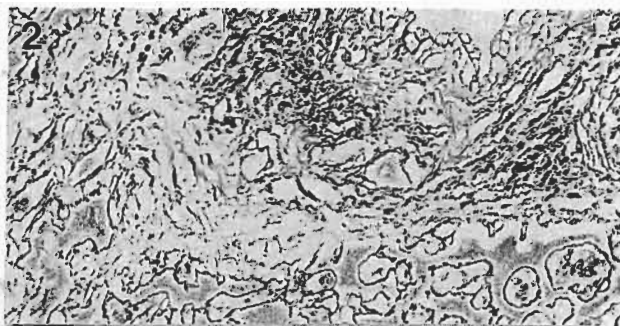
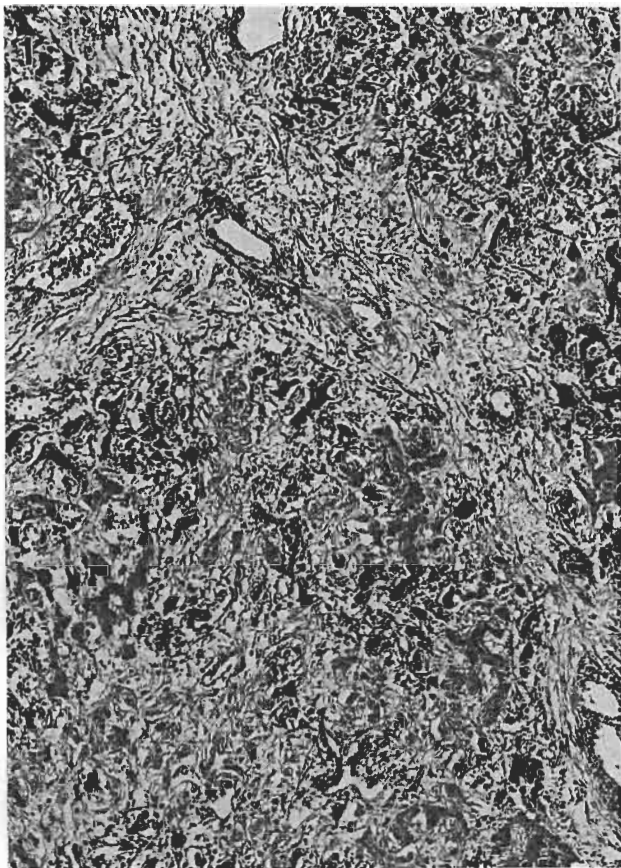


アルパカの肝臓

家畜衛試毒性病理研究室・埼玉県大宮家畜保健衛生所出題 第33回獣医病理学研修会標本No.596



動物：アルパカ，雌，推定1歳。

臨床事項：導入時から下痢が認められ，4日後には41.5°Cの発熱があり，食欲不振に陥った。治療を行ったが症状の改善はみられずに導入後22日に死亡した。赤血球数は $280 \times 10^4 / \mu\text{l}$ ，Ht値は11%と極度に貧血し，白血球数は $5.4 \times 10^4 / \mu\text{l}$ であった。GPTは1.0Ku，A/G比は0.52に低下して，低アルブミン血症が示唆された。肝臓と脾臓から*E. coli*が分離され，コロナウイルスとアデノウイルス7型の抗体が陽性であり，糞便に3種の未同定虫卵が認められた。

剖検所見：肝臓は腫大し，ゼリー様物が付着し一部は横隔膜と癒着していた。このほかに，胸水の貯留，心外膜のゼリー様物の付着，心筋の退色，肺に小豆大の結節，腹水の貯留と腹膜のゼリー様物の付着，胃腸のリンパ節の腫大が認められた。

組織所見：肝臓では高度の鬱血と線維化があり(写真1)，肝小葉は萎縮し，肝細胞は疎開し，大小不同や再生像がみられ，ときには偽胆管も形成していた。線維は間質の門脈周囲からCray-pipe-stem様を呈して増生し，小葉内に侵入していた。増生した

膠原線維には多量の好銀線維が混在していた(写真2)。線維病巣内には好酸球のほか，リンパ球，形質細胞，好中球の浸潤がみられた。骨髄巨核球や赤芽球系細胞からなる造血巣(写真3)もあった。また，褐色の色素が沈着していた。一部に血管の内膜が増生し，内腔に石灰化した異物が認められた。一部の切片には，虫卵が認められた(写真4)。この虫卵は黄色の壁で小蓋を欠き，毛細血管内に存在することから住血吸虫卵と考えられた。しかし，種類は不明で，虫卵数も少なかった。

考察：本例の肝臓病変では高度な線維化を主体とし，好酸球などの浸潤，色素沈着及び血管内の虫卵の存在から住血吸虫の虫卵が関係していることが示唆された。典型的な住血吸虫症の肝臓病変では仮性結核と言われる肉芽腫を形成することが知られているが，未熟卵は肉芽腫をつくらないとの報告もある。本例の肝臓病変も未熟卵による可能性が考えられた。また，病巣内に髓外造血がかなりあったが，臨床的に高度の貧血がみられたことから骨髄機能の低下があったと考えられた。

組織診断：髓外造血を伴った鬱血性肝線維症。